
音色

だぶ-ぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音色

【Nコード】

N3551C

【作者名】

だぶ - ぱ

【あらすじ】

アーティストを夢見る音痴な千花。天使の歌声を持つ不良の祥大。やってみなきゃわからない青春がある。

出来心

明日香サンに憧れた。

明日香サンみたいにあのでつかいステージでキラキラ輝きたい。
たくさんの人と笑顔を分けあつてたくさんの人に希望を見せて

最近デビューした五人組バンド > tomorrow's < はシングル
売り上げランキング、着うたランキングで3ヶ月連続一位を獲得し
ている大人気アーティストだ。

ボーカルは木村明日香。

かつて、あたしん家の隣人で勉強を教えもらったり遊んだりして
いた、綺麗なお姉さんだ。今はもう東京に引越してしまつたが思え
ば自慢話。彼女は子供の頃からの歌手になるという夢を22歳で叶
えた。

そんな明日香サンのデビュー前の小さなステージで歌った姿を見て
当時13歳のあたしも歌手になりたいと思つた。

それが始まりだった。

出会い

『千花？どうしたの？大丈夫？』

お母さんが部屋に突っ込んできた。

「え、何？？」

『あれ、今叫んでなかった？』

「別になんも」

『そう、最近こちら辺で露出狂がでるって話を聞いたから出たかと思っただわあ』

そう言ってお母さんは部屋を出てった。あたしは首をかしげてからまた歌い出す。

『千花！本当に大丈夫なの！？』

あたしは音痴だった。S M @ Pのあの人なんてもんじゃない。

『何？今頃？どんだけだよオ。（笑）』

親友の莉子は笑った。はつきり言ってお莉子には笑われなくなかった。

「莉子はパティシエとおなったんだよお？」

『え、あたしは順調だったっの』

莉子にはパティシエになる夢があった。だけど、デザインセンスが無いうえに、味音痴という絶望的な性格があった。

『あたしたち、下手の横好きじゃんね。』

「マジかあ、好きだからしょうがないもんなあ」

好きなのに、下手。

こうしてあたしのアーティストへの希望は弱冠かすれた。

『千花、授業行かないの？』

「ん、やる気なくしたあ、いいや」

ああ、夢までは遠いなあ

あたしは裏庭から校内の最上階の階段へとサボる場所を移した。

「あれ」

窓がないのに風が来てる。屋上の扉が開いていた。すごい、鍵の所がめっちゃめっちゃになってる。誰かが屋上に上がるために鍵壊しちゃったんだ。

あたしの好奇心がちょっと笑った。

「すごーッ」

初めて屋上に上がった。強い風が吹きまくって気分がいい。

屋上の端っこに行って下を見渡してみた。

「田舎だなあ」

田んぼと山ばかり。でも、それが逆に気持ちいい！

もう、あくびが止まらない

素敵！

涼しい風に乗って綺麗な音が聞こえた気がした。余計気分が良くなる。

『きれいな水をあげよオ　ぞむ・まあま・戸惑う人の目に
音じゃなくて声だ　！　すごい！！
あたしの眠気は一気に吹っ飛んだ。立ち上がって辺りを見渡す。

『僕を知っているだろうか　もそばにいるのだけど　』

誰？どこにいるの？

見つけなきゃ　こんな歌声　逃がせない！！

『ワン！！』

え！？犬！？

振り向くと非常階段から子犬が飛びだして来た。子犬はそのままあたしに向かって突っ走って来てあたしにぶつかって跳ね返った。

『キャンッ』

「　大丈夫？」

子犬は抱き上げても警戒せずあたしの手をぺロぺロ舐めた。

「　かわいい　」

『　キュウ！』

顔をあげると、そこには佐原　祥大が立っていた。

オレンジがかった茶色の髪を肩まで伸ばして前髪を結んであげている。第3まで開けた青いシャツ、制服のズボンを片足だけまくっていた。

同じクラスの不良。

ろくに授業もでない、学校内で喧嘩する、煙草吸って停学になる、なんとなく孤立している男だった。

『返してくんない？』

「え？」

『その犬、返して』

「あ、うん」

あたしは子犬を下に下ろした。

『クウーン　ワン！』

子犬はあたしを見上げて靴の上に足をかけながらしっぽをふりまわった。微笑ましい光景だったけど佐原は眉間にシワを寄せて子犬を抱き上げた。

そのまま何も言わず背を向けて非常階段へと戻っていく。

「あ、ねえ！ねえ、佐原くん！」

あたしは慌てて佐原を呼び止める。佐原は背を向けたまま立ち止まった。

「さっき、歌ってたのって佐原くん？」

『だっ　たら？』

愛が呼ぶほうへ。

あの天使の歌声は佐原くんだった。

もう感激が止まらなかった。あたしの頭の中で一気に未来予想図が構成される

「素敵！あたしとバンド組もうよ！！決まりッ！！」

『あ？』

佐原くんは振り向いた。初めて目を合わせた。

結成願い

「佐原くんって飴系好きなの？ あ、これ！あたしも昔から好きなんだあ！いや、気が合うねえ！」

『触んな！帰れ！』

「もうちょっとフレンドリーに行こおよ。そんなツンツンしてたらレコーディング楽しくないよ！」

『意味わかんねえよ！ちょ、キュウ返せよ！』

「い、じゃん！めっちゃなついてるよ！」

非常階段であたしは佐原くんをバンドに誘う作戦を決行していた。

まずは、仲良くなること！

佐原くんは孤立している人だったけど喋ってみれば普通の人だった。ただちよつとツンツンしてるけど。

佐原くんが大事にしているこの子犬はおそらくただの柴犬。佐原くんはこの子犬をキュウと名付けているらしい。

佐原くんは鞆いっぱいいろんな飴を入れている。

キュウが佐原くんの鞆の中に顔を突っ込んだ。佐原くんはそれを見て赤い飴をキュウの口の中に入れた。

そうか、飴を食べるのは佐原くんじゃなくてキュウなんだ。

キュウは上手に飴を噛み砕いた。佐原くんはすかさずキュウの口に飴を入れる。消費が早いからこんなにいっぱい飴を用意してるんだあ。

いろんな事に気づくうちにあっという間に時間は経ってチャイムがなった。

佐原くんは最初は帰れとか死ねとか言ってたけど、チャイムになる頃には黙って隣に居させてくれた。

あんな歌声してるんだもん。悪い人なわけないじゃん！

結局次の授業もあたしは黙ったまんま佐原くんとキュウといた。

シンデレラ

『え！？佐原！？』

「うん！マジあれば天使の歌声だよ！」

『千花 あんた佐原の事知ってるでしょ？佐原なんか誘って』

「ちよつと絡みずらいかもしれないけど、話してみりゃ、普通の人大だよ？歌もめっちゃ凄いいし！」

『あたし 千花には普通に生きて欲しいよ』

「大丈夫だし！あたし、絶対佐原くんとバンド組んで成功させてみせるから！」

『 千花の事、応援しないわけじゃないけど 本当に叶うと思ってんの？夢は叶うなんてシンデレラだよ？』

確かに、あたしのお父さんはマラソン選手を夢見ていたらしいけど、今現在は朝ラッシュでもみくちゃんにされるただのサラリーマン。俳優を夢見るお兄ちゃんだって仕事に追われて、夢見てたことさえ忘れてる。

あたしが希望に満ちている今だって10年後には

「そんな時もあったねえ」って若かったあの頃として終わっちゃうのかもしれない。

「分かってるよ。でも、あたしやりたいんだ。下手だけど、それをフォローしてくれるのがきつと佐原くんなんだ。約束するよ、莉子に夢叶えるって約束する」

『そっか まあ、今だけだからね!』

「ありがとう!」

莉子は昔からあたしを認めてくれる。

お母さんよりもあたしを知りつくしているかもしれない。

あたしも、莉子のパティシエになりたいって夢、応援しようと思ってる。

佐原くんと上手くバンドを結成できたら

佐原くんは皆に歌を届けて、あたしは隣で皆に音色を届ける。

あたしの未来予想図はどんどん膨れていった。

ROLL

『ちゅ・ことで、今日は全部活休み。全員、学活が終わったら即帰宅しいや。相川、聞いてんのか?』

あたしは視線をそのままに片手をあげた。

『ホンマかいな』

先生はあたしを全く知らない。あたしはこう見えてちゃんと話とか聞いてんだっつ・の。

あたしの視線の先には佐原くんがいた。

たったいま校門を跨いで昇降口に向かって歩いてきてる。

「ちゃんと来たんだあ・」

昨日、別れ間際に

「明日も誘いに来るから!ちゃんと学校来てよ!信じてるんで!」

って言った。

ちゃんと来てくれた。

『あゝッ！終わったあ！千花、トイレ行こお！』
「うん あのだ、ちよつと付き合ってくんない？」

『うん？いいよ』

あたしは莉子を誘って屋上へ向かった。

『うわ、すごッ！コレ千花がやったの？』
「違うよ、最初ッから壊れてた」

あたしは莉子に向かって人差し指を口の前にあてたポーズをした。
静かにしてて。

の意味。そのままあたしは莉子を連れて屋上に上がって非常階段の

手前まで行った。

『とりよがりの愛情は君に届かずにさまよったあ』

やっぱり佐原くんは非常階段にいた。今日も歌ってる。

莉子はその歌声を聞いてあたしの肩を叩き口パクで佐原？と聞いた。
あたしはうなづく。

莉子は目を丸くして驚いた。

あたしは佐原くんに近づいて後ろから脅かそうとした。だけど脅かすより先にキュウに見つかって吠えられた。
佐原くんはあたしに気づいたけど振り向きはしなかった。

「ポルノ、好きなん？」隣に座りながら聞いてみた。

『だっ たら？』

「そっ かあ - あたしはね、昔から榎原敬ゆきが好きなんだあ」

『あ とね、tomorrow、好き！あたし、ボーカルの木村明日香サンと知り合いなんだよ！』

『まあ、人の自慢話はつままないよね！』

いつの間にか莉子はいなくなっていて あたしは次と次の授業をサ
ボる事にした。

忠犬キュウ

気がつくあたしは寝ていたみたいで霞む視界の中は夕日色だった。

『そもつくろえず言葉になる 足りないなら つめてよ 』

佐原くんが歌ってる。階段によりかかった体を起こして佐原くんを探した。

『 はよ 』

佐原くんはあたしのすぐ上にいた。

「うん、はよん ふあッ」

しばらくして佐原くんは突然立ち上がって屋上を出て行ってしまった。あたしはキュウを抱いて佐原くんのあとを追っかける。

「あ、あたし ちょ、鞆取ってくるから待って！」

慌てて教室に入った。鞆を取るときあたしの机の上に『さき帰つて
るよ！莉子サマ』と書いたメモが置いてあった。あたしはそのメモ
をポケットに入れて窓に身を乗り出す。

門の所に佐原くんが立っていた。あたしは走って階段を降りて佐原
くんの所に向かった。佐原くんは25メートルくらい先で再び歩き
始めた。でもゆっくりだったからすぐに追いついた。

あたしは佐原くと2メートルくらい間を開けて並んで歩く。

学校を出て、坂道を下って細い路地に入った。

路地を出て、国道に出た。こちら辺で一番大きな道路だ。

腕の中でキュウがむずむずした。勘でちょっと戻った所のコンビニ
からビニール袋をもらった。

戻ってくると予想通り立派なウンコだった。キュウは胸を張って和
んだ顔をしていた。

佐原くんはすでに国道を横切る横断歩道の向こう側。でもちゃんと
待っていてくれた。

あたしは信号が青になるのをまった。
すると突然キュウがほえだした。

キュウは慌てて横断歩道の向こうにいる佐原くん目がけて走り出す。
トラックも気にせずに。

「え？」

きつとあたしは佐原くんと同じ事を思った。

「キユウ!」

「!」

たくさんの人が横断歩道を埋めつくす。

トラックは避けようとして信号機に激突し、煙を吹いていた。

トラックの荷台に乗つけられた鉄パイプは道路に転がって、そこにキュウの姿はなかった。

『ワン！』

通訳係 成海

キュウはあたしの腕の中だった。

『おい、大丈夫か？』

自分では気づいてなかったけど、あたしは必死にキュウを追いかけていた。

マラソン選手が走りながらドリンクを取るようにあたしは走りなが

らキュウを拾い上げてそのまま佐原くんへ激突したんだ。佐原くんは激突した勢いで自販機に激突する。

って事は、キュウは助かってあたしも助かったんだ！！

『キュウ、ありがとっ言えよ』

分かれ道になって佐原くんはキュウに言った。

でも、キュウはあたしの腕の中ですでに夢の中。

「ただいまあゝ」

『え！？帰ってきたの！？』

帰ってきた途端お母さんの声がリビングから聞こえてきた。

「え、駄目だった！？」

『駄目とまでは言わないけど 帰るなら帰るで一言いいなさいよあゝ
あんたの布団ないわよ？』

「え！？なんで！？朝まではあったよね！？捨てたの！？」

『そおだよゝ まあゝとりあえず今日はホテルでも行くのね。明日帰ってきなさい。明日までには布団とか部屋も掃除しておくし』

「ホテルってどこなの！？そんな金ないし！ちょ お母さんどうゆうこと！？」

『あ、千花おかえり！ちょっと着替えてきたらコロッケあげてくれない？』

お母さんは電話をしていた。相手は相川　成海（22）。あたしのお兄ちゃん。

「お兄ちゃん帰ってくるの？」
『もう帰ってきてんの。今成田だつてさっき電話来てね』

お兄ちゃんは通訳の仕事をしている。だから外国へはよく行く。

最近は海外ロケのテレビ番組にも呼ばれるようになった。

おかげで、俳優やタレントや歌手などのサインが家の玄関をうめつくしている。

佐原くんの了解サイン

『 ボーカルやるけど? 』

「 つそ!マジ!? 」

梅雨も本番の日。

佐原くんはボーカルを引き受けてくれた。

あたしの未来予想図はもう止まることを知らない。
もう感情でしか考える事ができない。

ふいに朝、担任が言った9月の文化祭の出し物の話を思い出した。
クラスか学年で何かやる他にも全校生徒が主役と考えてこの学校に

は昔から体育館を使った個人の出し物がある。
そこでは漫才をやる人もいればダンスを披露する人もいるし、部活
で出る人たちもいる。吹奏楽部だとかチア部だとか。

これじゃん。

「文化祭まで3ヶ月ちよい！最初のデビューはこっから始めよーよ
」！

『はい？』

あたしの勝手な提案の勝手な決定によりあたしと佐原くんは文化祭
で歌を歌う事にした。

湿気は憂鬱な気分させるけど今年の6月は違う。湿気なんかに構ってられない夏がくる。

あたしの夢が一步前進した。

プ
ア
ア
ー
ッ
ッ
ッ

金色に輝くサクソスやトランペット、テンポよくリズムを刻む小太鼓や大太鼓。

ピアノ フルート ドラム 鉄琴

吹奏楽部の軍団だった。軍団のトランペットの一人があたしに気づいて近づいてくる。

茶色い巻き髪の可愛い女の子。
楽器の音が煩くて普通にしゃべっても聞こえないからその子は大声

で『何かようですかあ?』と言った。

「あの、音楽室空いてる日にち教え」

『ええ?聞こえません!』

「あの!音楽室空いてる日にち教えてくれませんかあッ!」

『文化祭終わるまで使えないと思いますけどッ!?』

音楽室は吹奏楽部に占領されていた。

『教室でいいんじゃない?屋上の鍵直されちゃったし』

『ねえ!あたしも一緒に居ていい!?』

放課後、教室で練習する事を莉子に伝えると莉子は楽しそうに言った。もちろんあたしはOKした。

「ところでさあ、何歌おうかあ？」

『別に何でも』

「うーん やっぱポルノ？」

佐原くんの目が

あたりまえじゃん。

と言った。

てことで文化祭は佐原くんの好きなポルノを歌う事に。

噂のあたしら

キーンッ

家から苦勞して持ってきたスピーカーが気合いを入れた。

時刻は午後6時ちよい。

あたしの準備は出来た。佐原くんはとっくに出来ている。

窓ガラスごしに佐原くんとアイコンタクトをとってあたしは赤いエ
レキギターを構える。

そして、弦を勢いよく撫でた。

静かだった教室に派手にエレキギターの音が響く。あとはあたしの指が佐原くんに合わせて動くだけ。

『新たな旅立ちにmotorbikeオンボロに見えるかい？ handleはないけれど曲がるつもりもない』

窓ガラス越しに見た佐原くんはすごく楽しそうだった。言うほど一緒にいるわけじゃないけど、あんな楽しそうな顔、初めてみた。

見てるあたしや莉子までいつの間にか笑顔になっていた。

『あの調子なら文化祭は心配ないね』

「マジだあー。佐原くんが了解してくれなかったらあたしの未来予想図は」

『未来予想図？』

「ん。まあ、とにかくあんな歌声してるんだし、いい人に決まってるじゃん！」

『それはもう聞き飽きたっつゝの』

『僕たちは自分の時間を、動かす歯車を持っていて』

佐原くんは気が付いているのかわからないけど、いつの間にか教室の後ろの方に男の子たち数人と前の出入口に女の子たちが何人かいた。

佐原くんの歌声とスピーカーから流れる音に混じって

あの人すごい
うまくない？
ヤバイねえ

って聞こえてくる。

ここはステージじゃないし、明日香サンみたいにファンがいっぱいいるわけじゃないけど、一瞬夢が叶った気がした。

吹奏楽部

練習を初めてから3週間がたった。

日に日に佐原くんの天才的歌唱力に驚くギャラリーたちが増え、最初莉子だけだったのが学年や先生たちを越えて有名になった。

『あ、ねえあんた。相川千花だね？』

移動教室で廊下を歩いているとあの吹奏楽部の可愛らしい女の子に話しかけられた。

「はい？相川ですけど」

『あんたとさ、佐原ってバンド組んでる？』

「え、うん」

『桜にいい考えあんだけど！5年連続県大会優勝の最強吹奏楽部とあんたたちで文化祭りあげない？』

彼女は吹野 桜。

一個上の先輩だった。先輩が言うにはあたしたちと吹奏楽部で組んで、今年の文化祭最優秀団体賞を狙おうじゃないか。

という事だった。

あたしはもちろん大歓迎だった。ギターだけで寂しい所に5年連続県大会優勝の最強吹奏楽部がという名のオーケストラがついてくれるなんて、先輩の言う通り文化祭は盛り上がるに違いない。

ただ佐原くんがなんて言ってくれるかだ。

『いんじゃないね？あっちが組みたがってたんだろ？』

やっぱりやっぱり、あんな歌声してるからには性格も裏切らない！

あたしの未来予想図は膨れすぎて溢れだしそうだった。

しかし

『は？ポルノ？何それ・趣味悪ッ！やっぱEXの方が盛り上がんじゃない？ねえ、みんな！』

『あ？EX？キモ　歌う気失せるし文化祭も盛り下がるわあ』

『は！？EX侮辱したヤツは宇宙1の恥知らずだね！』

『てめえだって、人の事言える根性か！？』

吹奏楽部は言い換えればEXのファンクラブ。
ポルノ大好きヤンキーは一步も下がる気はない。

相性がわるかった。

「　っじゃ、間を取ってtomorrowsは！？」

しらけた。空気には

ないだろ。

と書いてあるぽかった。

「だよねえ」

『いんじゃない?』

佐原くんだった。

先輩も、まあいつか。

という風に、口を尖らせてうなずいた。

体育祭

最初の1ヶ月はそれぞれ個人練習をした。

『紗子が前奏入ったら4のリズムでフルートだからねえ』

先輩がピアノに向かって頷いたらそれが合図。ピアノから入ってフルート、あたしそして、佐原くん。

『
』

文化祭まであと2ヶ月。

『千花、競技何でる？』

「うーん やっぱ50じゃん？他は出来ないよぉ」
『だよねえ - 』

文化祭の前にまず、体育祭があつた。

今年は50とかハードルとか個人やってそれから学年種目いく。
あたしら2年はクラス対決、40人41脚やる。40人41脚はあたしらのクラスだけ。あとの2組は37人38脚。あたしらのクラスだけ何故か人数多いから他のクラスよりもちよつと不利。
だからこそ気合い入る。

『となると 一応真ん中は相川やなあ まあ長瀬と小野やて今年こそ来てくれるとは思っけど』

はあ？あたしっすか？

40人41脚の配列は男女分けてサイドにデかい人ゝチビの順。つまりはM型って事。あたしは女子背の順で前から三番目。でも、前にいる二人は一人は足骨折中。もう一人は登校拒否。だからいまんところはあたしが真ん中。今年は50とかハードルとか個人やってそっから学年種目いく。

あたしら2年はクラス対決、40人41脚やる。40人41脚はあたしらのクラスだけ。あとの2組は37人38脚。あたしらのクラスだけ何故か人数多いから他のクラスよりもちよつと不利。だからこそ気合い入る。

『 となると 一応真ん中は相川やなあ お前らも知ってるよおに、小野は参加出来へんから。 まあ長瀬やて今年こそ来てくれるとは思うけど 』

はあ？あたしっすか？

40人41脚の配列は男女分けてサイドにデかい人ゝチビの順。つまりはM型って事。あたしは女子背の順で前から三番目。でも、前にいる二人は一人は足骨折中。もう一人は登校拒否。だからいまんところはあたしが真ん中。

ピーーッ!!

笛の音が体育館中に響き渡る。担任がせーの　！と声を張り上げあたしたちは足を踏み出した。

あれ　あれ？　れれれれ　！？

「　ちょまああッ！！」

男女の一步に差がある上に、サイドがだんだん端に行っちゃうから真ん中のあたしの足は両方に持ってかれて

「　」
「　千花大丈夫　？」

「　股痛あい　」
「　」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551c/>

音色

2010年12月18日14時16分発行